しつけ

(2016.01.05)

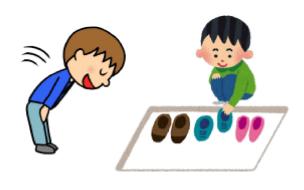


園で一所懸命「しつけ」ているのに、家庭では園と一緒にやってもらえないという話を聞きます。園で 決めたことだから、と一方的に押し付けるつもりはありません。「しつけ」は「家庭で決めることだから 自由だ」と言えばその通りです。しかし、「しつけ」はしないというのでは困ります。「躾」は文字通 り、美しい身のこなしを体得していくことであり、しつけ糸のように良い折り目、良い習慣をつけて、子 どもが社会に出てスムーズに生活し、困らないようにするためです。

最近、三歳で入園して来る子の中には、良い家庭で育ったのだな、と感心する子がたくさんいます。昼食の時に、全員の配膳が終わるまできちんと姿勢を正して待って「いただきます」ができます。驚くのは、三歳でも箸を上手に使いこなし、こぼさず綺麗においしそうに食べることができます。勿論、待てずに暴れる子も、手でわしづかみにして食べ散らかし、悪戦苦闘している子が、まだまだいます。

三歳でもオムツをしたまま入園してくる子が増えています。紙オムツの普及で、止むを得ないこともあるでしょう。入園までにはトイレット・トレーニングをして来て欲しいのですが、間に合わなかったら入園後、園と一緒にトレーニングをして欲しいと思います。園ではオムツを取ってトレーニングしているのに、家に帰るとオムツを付けてしまうのでは先に進みません。「家ではできないので、園で直して下さい」と、子どもの好き嫌いを直すことさえ、園に放り投げる親もいます。「この親にしてこの子あり」というが、子の「しつけ」は良くも悪くも親次第ということでしょうか。

しかし、園では「しつけ」は家庭の問題と突き放すつもりはありません。園の中ではあいさつ、靴を揃える、順番を守る、食事のマナー等を徹底しています。せめて子ども達が社会に出て恥をかかないように、子ども達のためにご家庭でも、一緒に「しつけ」をして欲しいと願っています。園は集団教育施設です。一人一人の子ども達が、しっかりと社会のルールを学び、社会性、人と関わる力を付けていけるようにしたいと思います。



しつけ・自由と規律

(2016.02.01)



先月「しつけ」のことを話しましたが、園便りの「しつけ」とは違う内容で、校則と家庭の方針、しつけについての投書が新聞に載っていました。ほとんどの中学では、茶髪やピアスを校則で禁止しています。集団生活の中では許されないという意見と、校則で決まっているからと押し付けるのは良くない、という意見が対立していました。園ではピアスをする子はいませんが、最近は、髪を染めたり、頭にイナズマみたいなソリをいれたり、パーマをかけてくる子がいます。

親がいっぱいピアスをしていたり、刺青をしている人がいる園があるようですが、流石に本園にはそういう人は少ないように思います。親がしていたら「子どもがして、どうして悪い」「人に迷惑をかけているわけじゃないし、いいじゃないか」と言われたら困ります。しかし、先月、園は集団教育施設であり、集団生活の中で、社会のルールを学び、社会性を身に付けていくところと申しました。集団では、何でも自由にやって良いという訳ではなく、その集団のルールは守らなければならないと思います。しかし、園ではパーマや多少の茶髪は問題になりませんから、自由で良いでしょうが、中学生くらいになると、ある程度規制しないと放縦になってしまうような心配があります。逃げるわけではありませんが、やはり「家庭のしつけ」の問題が大きくなると思います。まさに自由と規律の衡量の問題でもあります。

園児の整然とした集団行動を売りにしている園があります。軍隊ならまだしも、北朝鮮や戦前の日本の学校を連想してしまうのは、私だけでしょうか。日本は、個性や違いを認めない同一性、みんな同じ、一斉、揃っていることが好きな国民性なのでしょうか。(違っているといじめに合うのも、こんなところに原因があるように思います。)勿論、個人の自由を守るためには、集団の中で個が衝突しないように、規則・ルールが必要です。個と全体のバランスの中で比較衡量が大切でしょう。

園では、細かく規則を作ったり、個性を奪うようなしつけを押し付けたり、「しつけは家庭」と突き放すつもりはありません。子ども達のためにどうしたら良いか、一緒に考えて行きたいと思います。「しつけ」も「規律」も子ども達のためのものです。子どもが初めて出会う小さな社会…幼稚園の中で、社会に出てスムーズに、楽しく生活できるように、良い生活習慣と社会性を身に付けるようにしています。ちなみに園では、あいさつ・靴を揃える・順番を守る等を徹底しています。これらができるようになると、自然と他の事もできるようになります。



ほめ達 ・・・バイパス効果

(2016.03.01)



ほめ上手の達人の検定試験があるそうです。お店の接客態度等を、客を装って調査し、悪いところを指摘して改善するように促すコンサルティング会社を経営していた人が、マイナス点ばかり指摘していても、効果は芳しくなく、調査を依頼してきた会社も、自分も、ストレスばかりだったとのことです。そこで、反対に良い点を探し、それを報告すると活気が出て、悪い点もなくなってきました。そして、悪い点を調査する会社から、ほめる調査をする会社に方向転換し、「ほめ達」検定を始めました。

子ども達と生活している中で、私も同様な経験をしました。いくら言っても、いくら注意して叱っても、友達に噛みついたりひっかいたり、繰り返している子がいました。どうして、こんなことをするのか悩みました。注意するのは止めて、悪いことをした時は黙って「本当に困った」「悲しい!」という顔をして無視しました。すると私のことをとても気にして、心配そうに見るようになりました。反対に、友達に優しいことをしたり、譲ったりした時には「君は本当に優しい子だ」と抱きしめたり、高い高いをしてあげました。次第に悪い不適切な行動は消え、適切な善い行動が増えていきました。私は、これはバイパス工事のようなものだと思いました。本道が混雑して、バイパスを通すと、交通の流れが良くなり、本道にあったガソリンスタンドやお店がバイパスの方に移り、次第に本道が忘れ去られるのと同じです。叱られてばかりいると、退行して、かえって不適切な行動が沈着し、強化されてしまうが、適切な行動があった時に褒められると、その方が快適なので、その行動が繰り返されるようになり、適切な行動が増え、不適切な行動が少なくなります。これを「バイパス効果」と考えています。

私個人は、あまり叱られたりしたことはないように思いますが、長い人生の中で、ズバッと注意されたり、叱られたことが、人生の指針になっています。叱られてばかりであったなら、ネガティブになって叱咤や注意が指針にならなかったことでしょう。小さなことでも、良いところを見つけてほめることが大切です。短所も見方によっては長所になります。「のろま」と言わず、丁寧で一生懸命と誉めれば、もっと早くなります。泣き叫んであばれている子がいたら、まだ自分をコントロールできず、自分と戦っているのだと、泣きやむのを待って、泣き止んだ時に、よく我慢したね、スバラシイ!と抱き上げて誉める。子育ての中で「ほめる」ことは探せばいくらでもあるでしょう。



無菌・除菌社会(その1)

(2016.05.02)



人は、少しずつ菌に触れる中で、免疫力・抵抗力をつけ、強い体をつくる。同様に思い通りにいかない体験や他人との衝突、もめごとを通し、人と関わる力(主張する力、対処法、やりすごす力、忍耐力等)を学び、強い心をつくる。

海外旅行をすると、外国人はほとんどお腹を壊したりしないが、日本人はすぐにお腹を壊す。無菌で育っているからか? 保育園を始めて驚いた。その防菌・除菌の徹底ぶりに。給食室からクラスまで、調理した物を運ぶ時は、外気に触れないように完全密封した物でなければならない。配膳をする時も、帽子、使い捨てマスク、手袋をしていなければならない。

幼稚園では、数十年間、ご飯給食を行ってきた。子ども達がお米を研いで、水加減も量り、炊いていた。月に一度のカレーライスも、子ども達が調理に関わり、勿論、素手でマスクも付けず配膳をしていた。幼稚園の大らかで自由な運営と違って、こども園、保育園は、やたらと指導、規則が多い。勿論、清潔で衛生的な方が良い。有害なウイルスや細菌を除き、子ども達の健康を守るのは当然であり、幼稚園では手洗い・うがいを徹底している。しかし、衛生観念も程ほどにしないと、動きがとれなくなってしまう。子ども達が調理することも、年長児が年少児の配膳を手助けすることすら駄目などとなると「食育」ってなんだろうと思う。

お泊り保育でBBQをした時、ソーセージは一人〇本と決め、自分で焼いた。しかし、ソーセージは転がる。大事なソーセージを落とし、汚れたソーセージを見つめがっかりしている子がいた。一人の子が「洗って、焼けば大丈夫?」と言ったので「キャンプだもの」と答えると、落とした子がみんな水道のところに走って、しっかり洗って持ってきた。笑顔になって「キャンプだもんね!」と言って美味しそうに食べていた。それから、何をするにしても「キャンプだもんね」が合言葉になって、自分で判断し、自分で工夫していた。保育行政の役人は、こんなところを見たら「とんでもない!|と言うでしょうか?

無菌・除菌社会(その2)

(2016.06.01)



前の月に、少しずつ菌に触れることで免疫力や抵抗力がつき、少しくらいの菌には負けない強い体をつくるお話をしました。心も同じように、他人との衝突・トラブルを通して、人と上手に関わる力を育てます。人と関わって生きることは、大変難しいことです。他人と葛藤し、他人の心を考えることは、とても疲れることです。そんな気を遣うよりも、テレビの前で一人で遊んでいる方が楽かも知れません。

しかし、人は人と関わらずには生きていけません。人と関わる力は、幼児期に、小さな集団の中で喧嘩をしたり、仲良くなったりしながら育つのです。自分とは違う他人がいて、自分とは違う考えを持つ他人と、衝突したり、自分と同じ思いの他人と共感したりしながら、人と関わりあって生きていくのです。特に、喧嘩やトラブルを通して嫌な思いをしたり、又、仲良くなって遊ぶという繰り返しの中で、人と関わる力が育ちます。人間関係がどうもうまくいかない…どうしたら良いか思い、自分をコントロールし、我慢したり、いやなことを無視したりして、それを乗り越え、対処することを学んでいくのです。

無菌社会・除菌社会が広がっています。子ども同士のトラブルがあると、すぐに親が出てきて、大事件になってしまうのです。幼稚園では一方的に攻撃されたり、集団でいじめたりするような場合は、積極的かつ強力に介入します。弱い者いじめは絶対に許しません。喧嘩が始まったら、よく観察します。介入するのを我慢します。十分やり合わせます。自分たちで折り合いを付け、解決策を探るように見守り、時には最小限のアドバイスをします。喧嘩、言い争いなど、子ども同志の揉め事は心を育て、人の痛み、悲しみが分かる腹の太い人になるために不可欠な経験であり、糧です。「ケンカは悪いこと」と、抗議されると、幼稚園もこれ以上炎上させてはかなわないと止めてしまいますが、子ども達に必要な「負の体験」を奪ってしまうことになります。「負の体験」をなくして、無菌状態で育った子どもは、社会に出ても耐える力がなく、すぐに参ってしまうようになります。人を理解し、耐える力を持った、たくましい子を育てます。



未来への投資

(2016.07.01)



こども園法の施行から一年が過ぎ、市町村によって、大きな差が出ている。保護者負担の軽重だけでなく、規則の運用、施設型給付の中味について、市の姿勢に違いがある。例えば延長保育や土曜日保育に、たった一人の子であっても、有資格の保育士を二人付けなければ給付は受けられず、しかも給食まで提供するようにと言う市町村がある。一方で、有資格者一人と無資格者一人の二名でも良いとする市がある。現実には無資格者の中には、子育てが終わった優秀な人が大勢いる。保育者の手がもっと必要な乳幼児数と保育士の数は、規程では満一歳以上では六人に一人の保育士となっているが、こんな無理な数を緩和しようとしている。保育室等の一人当たりの面積も狭くしようとしている。保育環境を悪くするばかりで絶対に許されない。現場を知らない官僚が規定を作り、それを金科玉条のごとく守ろうとする地方の役人がいる。規定にしがみつく一方で、単に親が働けるように預け先を増やすため、基準を緩め、環境を悪化させている。この国の行く末を思い暗くなる。

就労の有無に関わらず、保護者の子育てに関する負担を軽減し、全ての子どもに質の高い保育を保障するというこども園法の理念に賛同したが、こども園制度に翻弄されている。なんだか幼児教育が楽しくなくなってしまった。自由闊達に幼児教育に情熱を燃やし、子ども達と伸び伸びと戯れていたのに、給付金に縛られ、規則に拘束されることになってしまった。保護者への直接助成の方が有効である。活力を生むのは規則等の拘束を取り除き、自由な活動を保障することである。独自の建学の精神と理念に従い、運営は保護者との自由な直接契約による、と思っていた。国、行政は子育ての重要性を認識しているとは思えない。資源無き日本にあるのは、人的資源のみである。不況の原因は明るい将来のビジョンが見えないからと言う。子どもは国の未来である。

ノーベル経済学賞を受賞したヘックマンは「就学後の教育の効率性を決めるのは、就学前の教育にある」と述べ、そこで、ペリープレスクールの研究結果をあげ、幼児教育を受けた子と、そうでない子の差について述べている。四十歳の時点で、収入に四倍の差、犯罪率・生活保護受給率も低く、個人の生活ばかりでなく、社会も安定する。就学前教育の社会全体の投資収益率は15%~17%と、通常の公共投資ではありえないほど高い。どこに投資すべきかは、明らかである。



ピンチはチャンス(再生)

(2016.09.01)



子ども達は、私が逃げると追いかけて来る。そして、一人増え、二人増え、みんなで追いかけて来る。その日もそうだった。逃げ場を失って、いつも駆け登っていた山小屋アスレチックに駆け登ろうとした時、激痛が走った。その日(6月28日・水)は何件か用事があったので、そのまま用事を済ませて家に帰った。金曜日まで用事がたて込んでいたので、湿布をして、足をひきずりながら、そのうち落ち着くだろうと軽く考えていた。しかし、7月2日の土曜日には急変していた。

「もしかしたら?」と思っていたが、医者は「残念ですが、アキレス腱が切れています。」と、冷たく (冷静に?) 宣告した。7月・8月は既に予定がビッシリと入っている。これからのことを考えると「どうしよう!」と思いが巡った。「完治まで8週間かかります。紹介状を書きますので、○○病院へ行って下さい。」とのこと。病院へ向かいながらかなり落ち込み、あれも、これもキャンセルしなければならない。動けなくなった後の手配と、楽しみにしていた予定も、みんな消え去ってしまうことに暗澹たる思いだった。

病院は相変わらず混んでいた。待っている間、いつもの黙想をして、心を落ち着けていると、目の前の雑念が消え、とても気持ちが静かになった。しばらくして隣に座っている夫婦に気付いた。今朝、自宅の階段から落ちて、手首を骨折して、転送されて来たとのことだった。私が黙想している時「背筋がピンとして、姿勢の良い人だな」と思ったと言い、私のことも聞かれて「それは大変ですね」と気の毒そうに言われたので、「今、想うと天の啓示だったような気がするのです。自分の体と生活にじっくり向き合う良いチャンスを与えられたような気がします。自分の体を過信し、油断していました。自分の人生を、もう70歳を過ぎたのだから、楽をして、と、怠惰な生活をしていたのではないかと反省しています。もう一度、自分の体と人生の見直しをして、人生を生き生きとしたものにするための、やり直しの大切な時間だと思います。惰性に流れそうになっていたマイナスのサイクルを、プラスへギアチェンジする時間と考えると、決して無駄なことでなく、良かったと思います。」と言って別れた。そして2ケ月、辛くて苦しくも、充実した夏が終わってしまった。

*歩けるようになったら、ゆっくり秋の自然を子ども達と楽しみたい。



継続は力なり

(2016.10.01)



赤ちゃんが寝返りをうとうと、繰り返しチャレンジし続ける。うつぶせになると、体を両手で支え頭を持ち上げるが、長くは頭の重さに耐えられない。しばらくすると、両手をつっぱり、腰を上げ、ハイハイをするようになる。次はつかまり立ちだ。立って、一歩を踏み出すが、倒れる。それでも、何度も失敗し、一歩が二歩に。周囲の大人もみんな拍手と歓声、感動。赤ちゃんも、満面の笑み。達成感と自尊と自信が、あのヤッターと言っているような顔に現れている。

人間は元々、不可能を可能にするように努力を続け、可能になった時に達成感を味わい発達してきた。 人間の体の中には、そういう努力のDNAが組み込まれている。努力せず何でも手に入る生活をしている 時には、生きる充実感ではなく、怠惰に時が流れるだけで、心から満たされることはない。

感覚遮断実験、食事も睡眠も空調等の生活環境は十分整えられているが、音も、見えるものも全ての刺激を断って、何日耐えられるかの実験である。被験者に学生アルバイトを募集したところ、こんな楽なアルバイトはないと、多くの応募者が集まった。ところが、一日も我慢できない人が大勢いた。それどころか、短時間で幻聴や幻覚に悩まされ、精神的におかしくなりそうな者が続出した。今では、精神障害を起こす危険な実験だとされ行われなくなった。動物園の動物も、檻の中に入れられて、エサだけを与えられているだけでは、ストレスでおかしくなってしまうそうだ。

人間は、元々周囲の環境から刺激を受け、何かにチャレンジするようにできている。子ども達は何も言われなくとも、あらゆることにチャレンジする。そして、次はもっと先に手を伸ばして、チャレンジし続け達成感を重ね、自尊感情を強くしていく。そこでは大人の余計な口出しは不要なのだ。大人は環境を整え、子ども達のチャレンジ精神を刺激し、子ども達が一歩前進するたびに「ヤッター」「できた!」と喜びを共感するだけ、見守るだけで良いのだ。

何でも与えられ、努力することもなく、新しいことにチャレンジする必要もない状況では、もっと良くしようという意欲はなくなる。子どもは少しハングリーな方がいいのだ。雲梯で、手が擦りむけてもチャレンジするのは「あんなに苦しいことを何でするのか、バカじゃない」「炎天下、汗びっしょりになって、延々と、エンドレスリレーをするのはおかしい」と思うような子になっては困る。幼児期は、達成感を味わい、自尊感情と意欲を育てる時である。



感動の十月

(2016.11.01)



悪天候の十月でしたが、私には感動の十月でもありました。 突然のドシャ降りの雨の中での大地おどり。子ども達は「雨が気持ち良かった!」と雨などものともせずに、ビシっと決めてくれました。私も雨の中、子ども達の前に立っていました。子ども達は「足、大丈夫なの?」「めがねが雨で曇っている。見えるの?」などと、踊りながら私の方を心配してくれる余裕もありました。雨の運営にお叱りもありましたが、この日しか休みが取れないお父さんは勿論、「雨の中、かえって感動した」「思い出に残る忘れられない運動会になった」「涙が止まらなかった」等々、沢山の感動の声が寄せられました。掲示板に全てを貼り出したいくらいです。子ども達と保護者の皆様、二重の感動をありがとうございました。

もう一つ、運動会が終わってしばらくして、3歳児のお部屋に行くと、子ども達が集まってきて、「足、もう大丈夫?」「治った?」と、私の足をいとおしむようになでてくれました。「もう、治ったよ」と言うと、大きな声で、みんなが「ヤッター、ヤッター」「バンザーイ」と、踊り出さんばかりに全身で喜んでくれました。そして、「じゃー、もう遊べるね」と言いました。涙が出そうになりました。

そして、次の週、月曜日、朝、窓を開けると、雲一つない秋晴れでした。よし、今日は子ども達と「龍の子山」へ行こう、と園に向かいました。担任の先生達に、「今日、特に動かせない予定がなければ、龍の子山に連れて行きたい」と言うと、まず、先生達が「ワー、嬉しい」「行きたいです」と二つ返事。すでに園庭で遊んでいた子ども達に「園長先生が龍の子山に連れて行ってくれるから、お部屋に戻っておいで」と呼び掛けると、いつもはすぐに戻って来ない子もいるのに、全員がサッと戻って来て、出掛る準備もサッとできました。

バスの中は、興奮と歓声でいっぱい。お山では、長いスベリ台を何回も何回も繰り返し滑りました。お山の頂上に登ると、遠くに筑波山がくっきり見えました。Aちゃんが「この間筑波山に、お父さんとお母さんとお姉ちゃんと僕で登ったんだ」と胸を張りました。「足で登ったの?」と尋ねると「足で登ったんだ」と、「本当にスゴーイ」と誉めたたえると、AちゃんのライバルのBちゃんが、「僕だって十回も登ったんだ」と、するとAちゃんが「僕なんか百回も登ったんだ」と、いつもの大風呂敷合戦が始まった。すると、Cちゃんが「アッ、ダイバツだ!」と指差す向うに、牛久大仏が。みんな、「本当だ、ダイブツだ」と見とれていると、Dちゃんが、「昨日の明日、歩いていたよ」と訳の分からないことを言い出した。「ヘェー歩いていたの?」と信じる子もいる。お腹が空いてきたので、帰路に着きました。いっぱい遊んだので、帰りのバスの中は、来る時よりずっと静かで、ぐっすり寝てしまった子もいました。



危機回避の能力を育てる

(2016.12.01)



ある幼稚園を訪問した際、園庭を子ども達が走ってきました。すると、若い先生が、突然、両手を突き出し、「走ってはだめ!」と、制止しました。「先生、今、何て言ったの?」と言うと、"アッ"という顔をして下を向きました。「最近、保護者から、強いクレームがあったのでしょう?でも、園庭を走らないで、どこを走ればいいの。転んでヒザを擦りむいたくらいでも、激怒するおかしな親はどこにでもいるよ。辛かったでしょうけど、子ども達に思い切り走らせてあげようよ」と言うと、涙を浮かべてうなずきました。走って転んだくらいだから、たいしたケガではないと思います。猛烈なクレームが先生を委縮させます。

ある幼稚園の園長が「私のところでは、子どものケガは一切ない」と胸を張りました。その後、その園を訪ねたところ、ブランコが取り除かれ、遊具がほとんどありませんでした。子ども達は、先生の笛に従って、整然と行動していました。これではケガのしようがありません。

子どもの周囲を見廻すと、危険な個所があります。しかし、注意を促し、危険を回避する力を育てれば回避できる危険と、子ども達では回避できない危険があります。回避できない危険や、大きな事故につながるような危険は、直ちに取り除かなければなりません。例えばブランコでよくケガがあります。認識力が育ってないと、動いているブランコに近づいて衝突します。入園当初、ブランコを動かし、ブランコは、向こうに行くと、直ぐにこちらに戻ってくることを、直接体験させます。人が乗っているブランコの前後には、近づいてはいけないこと、危険を予測し、回避する能力を身に付けるようにします。子どもは良くころびます。ころんで、ころんで、ころばないで走れるようになります。ころんだ時にも、パッと手で体を支え、顔を打たないような反射神経も身に付けていきます。幼児期の子どもとその行動を良く理解し、何が危険か、どう危険を予測し、回避するか深く見通すと、大きな危険は回避できます。

40年近く前に、初めて子ども達を筑波登山に連れて行きました。当時、幼稚園児が筑波登山することはなかったので、茶店の人に驚ろかれました。しかし、幼稚園児にとって筑波登山は簡単なのです。山に登るのは、体重を上に移動させることなので、体重の軽い幼児にはたやすいことなのです。小学生より楽々と登れます。(但し、体力がついてない年中少では無理です。) 転んでも、登りでは手がパッと出ますから危険ではないのです。しかし、注意するのは、下りです。ころんだ際に手を付く間隔が遠くなります。歩幅も広くなり歩きづらくなります。視線も遠くなり、注意力もゆるみます。特に、ゴール地点が下りだと気が緩みます。今まで、登りでケガをしたことは一度もありません。ケガは全て下りのゴール地点です。下りのゴール地点では教師を配置し、声をかけ続けさせます。子どものことを知れば、危険はわかります。子ども達を注意深く見守り、自由に、伸び伸びと活動させてあげたいと願っています。

